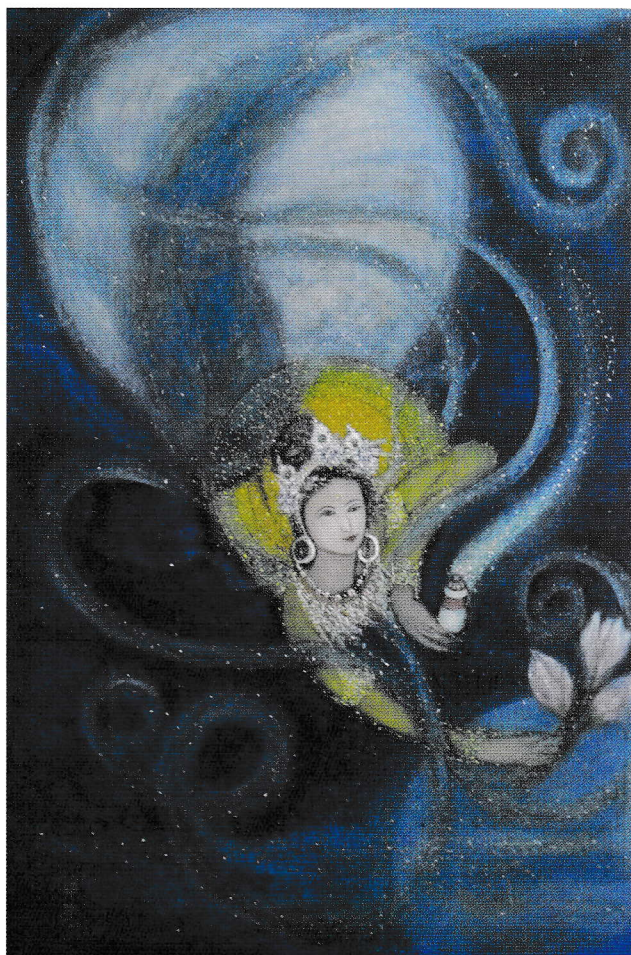


No.132 2022. 4. 1 発行
 大阪大谷大学博物館
 富田林市錦織北3丁目11-1
 ☎ (0721) 24-1039

2022年度・春・季・特・別・展

吉永邦治展 Kuniharu Yoshinaga Exhibition

異境への旅



「香夢飛天」185×123cm

2022年4月2日(土)～6月30日(木)

2022年度春季特別展として、元大阪大谷大学短期大学部教授・吉永邦治氏による「異境への旅」展を開催します。

2002年度には、秋季特別展「一光・風・水・地にいだかれて一仏の世界」を、2010年度には、春季特別展「一飛天・シルクロードの旅」をテーマに吉永邦治展が開催されました。今回は12年ぶりの「異境への旅」作品展となります。

東アジアの端での日本へは、文化交流の道（シルクロードなど）を通り、世界各地から文物がもたらされてきました。

吉永邦治氏は、その流伝された美を観るにつけ、その美の根源に立ち、もう一度見つめなおすことによって、すばらしい日本美の世界があらたに浮かび出てくるのではないかと、また、日本では、人々の脳裏から忘れ去られ、すでに失なわれているものや、気分をほっとさせる懐かしい景色や様相に触れ、それらを複眼的にみることによって、自身の感性が蘇ってくるのではないかと、という思いで現地を旅し、巡歴をくりかえされてきたと伺っています。

今展は、「異境への旅」で遭遇した、悠久を生きる民が夢見た世界をこころに感じながら描いた、彩色豊かな油彩画、鉛筆だけの素描画などの作品群で構成されています。是非、じっくりとご鑑賞ください。

異境への旅

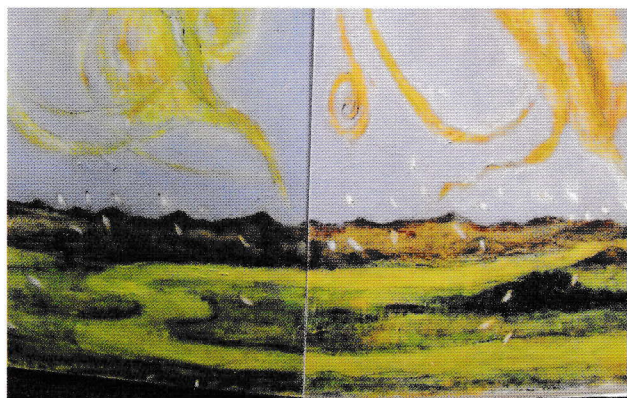
旅の始まり

今は昔、私自身は東シナ海に流れ込む川内川のほとりに生まれ、幼少青年期を過ごしたこともあって、なぜかアジアをそう遠い大陸とは思っていなかった。

時が流れ、薩摩川内を離れ、さらに、日本からヨーロッパへ旅をし、帰路、西から東へと旅を続けた。そして、帰国後、もう一度東洋世界を学びなおそうと、高野山にのぼり、山上で仏教・密教芸術やチベット語、サンスクリットなどの古語を学び、その根底にあるものを探求しつつ、その後も東洋各地の民族芸術を求め行脚をし続けた。異国の歴史ある遺跡、教会・モスク、美術館・博物館などを巡ると、そこには遠い昔から伝えられてきたものや、往時たちこめていたさまざまな民族の風気がただよっていて、それを身近に覗くと遠い過去がよみがえっていった。また、多種多様な民族の人々と直に触れ合うために、中近東の街の活気あるバーザルや市場に足を踏み入れると、極彩色の衣装につつまれた人々が混然一体となった異世界がそこに幻視された。

このように、私は、なつかしい原風景を求めて異世界へ旅立ち、さまよう中で思わぬ出会いをし、身をもって多くの体験をした。また、そこに出向かないと伝わってこないものに導かれていった様々な記憶が、私の中で重層的に積み重なって、新しい創造の源へと発展していった。

今回出展している作品群を前にされて、「博物館だより」にそえた言葉と、絵のタッチのなかの息づかいによって、美しい芸術世界と、旅の醍醐味を合わせ感じていただければ幸いです。



「川内川光景」(部分) 150×150 cm <未出品>

残影

私は、インド、ガンダーラ、シルクロード各地の仏教遺跡で、数千年前に刻み描かれた壁画を観るにつけ、飛天などの美しさに心を惹かれ、その根源を求めて旅をし、東洋美術を研究しながら油彩画や素描を描いてきた。今までの旅の中バーミヤンの巨大仏に出会い、その荘厳さに胸うたれた。



「西大仏磨崖光景」194×130 cm

2001年3月、巨大な大仏や仏龕とともに飛天群の壁画も粉々に破壊され、今や見る影もなく、断崖に巨大な空洞の穴が露呈したまま残されている。

が・・・私が、アフガニスタン国を訪れた1977年頃は、平和で豊かで明るい表情をしたアフガンの人々がゆったりと悠久を生きていた。破壊される前のバーミヤンの巨大仏像や飛天群をこの眼で観た時の深い感動が、今も鮮やかに蘇ってくる。また、過酷な自然の中、この断崖絶壁をもろともせず、こころを一つにして慈悲深いまなざしをもった「巨大仏」を掘り込んでいった古来の彫人たち、多彩な色を操り描きつづけた往時の画家たちに想いをつのらせた。

海拔2550メートルの高原にあるバーミヤンは、荒涼とした大山系が連なるなか、南側礫岩の切りたった断崖に、東西3キロにわたって何百もの仏堂や僧房窟が蟻の穴のように掘り込まれている。当時、この周辺には僧徒数千人が僧院に住まい、仏龕には、塑像の大仏・仏座像や弥勒仏が安置され、その前で、日夜、読経と祈りがささげられていたのであろう。往時の美しい荘厳な仏の世界がバーミヤン一帯を包み込んでいたのではないかと想像されるのである。

西側には55メートルもの磨崖仏（弥勒立像とも）が静かに佇んでいた。奈良・東大寺・廬舎那仏坐像の約15メートルを遙かに超えるもので、その景観は言葉に表せないほど存在感あるものである。紀元629年に、唐の都・長安を出発し、仏

法を求めて17年の歳月かけ、西域から中央アジアを経てインドへ、3万キロにおよぶ旅を続けた玄奘三蔵は、旅の途中、紀元632年、このバーミヤン渓谷を訪れた時、仏教が栄え大石仏が黄金に光輝いていたと「大唐西域記」に記している。

大仏の顔は、当時の異民族が仏眼超力を恐れたのか、口もとだけ残し眼の部分が半分削られていた。削られる前はどんな顔相であったのか・・・胴体の岩肌も風化し崩れかけ、手も足部分もさだかでなく、着衣のひだも剥落し崩れかけようとしていた。この巨大仏の前に、私は座り、砂塵が吹きすさぶなか、「わら半紙」を広げ、紙の端を瓦礫で押さえ、コンテで素描した。それらをもとに、何年もかけてカンヴァスに向かい、在りし日の巨大仏像を油彩で描き続けた。

瑠璃

飛天についての概要は、拙本「飛天の道」や前展の「博物館だよりNo107.No90」に掲載しているので、ここでは、バーミヤンの西大仏の天頂あたりの奏樂飛天に焦点をあてて視てみよう。

西大仏を下から眺め、頭部55メートル付近の天頂部分あたりに眼をやると、アーチ型に掘り込まれた天蓋に、天宮図や仏坐図が描きこまれ、仏龕内には、かすかに残った彩色を施した図柄らしきものが見られた。ざらざらした礫岩上の龕画面上には、顔彩ラピスラズリなどで彩色された壁画が残されていて、その印象は今もこの世ならぬ色として脳裏に深く刻まれている。当時の画家たちは、この地上50メートル辺りの大仏の頭部、仏龕上部に、足場を組み、砂塵吹きすさぶ中、この地に産出した岩彩などを運び上げたのであろう。技法を駆使して、翼のない天衣で飛翔する三身一相

(天人一体と天女二体)や飛天群を彩色豊かに描いている。

時がたち、粉々に吹きとんだ欠片にかすか



「奏樂飛天」121×114 cm

に残存していた奏樂飛天や、美しい飛天群を描いてみたいとの思いにかられ、資料から剥落しているかたちをイメージし、網膜に残存している自身の記憶をたどりながら、数年にわたって油彩で描き進めていった。今回その一部を展示している。ここの飛天や弥勒・未来仏を鮮やかに彩っている顔彩をもっていても、アフガニスタンが往古、シルクロードの十字路に位置し東西の交易路であったことがうかがえる。この交易路を南へ廻る道ヘラートからイランへ、北へ廻る道マザリシャルフからサマルカンドへ抜ける道ぞいを実際に旅し、剣のような険しい山々、道があってないような古来交易の道を進むなか、車から降りると、山一帯に鉱石などが露呈していて、鉱物を含んだ一欠片を拾い上げ手にすると、極彩色の顔彩・天空石（瑠璃・青金・ウルトラマリン）が混ざり込み美しく光輝いていた。

ここで、少し話しはアフガンから飛び、17世紀頃のオランダ出身の画家ヨハネス・フェルメールの彩色について、私のひとりごとを記すことにする。私は、ニューヨークのメトロポリタン美術館やヨーロッパ各地の美術館等で、フェルメールの作品を眼にしたが、その中でも、大阪市立美術館で2000年に「フェルメールとその時代」に出展の「真珠の耳飾りの少女」は忘れがたい。当時大阪の地下鉄などにポスター掲示がなされたこともあって、多くの美術ファンが美術館へ押しかけ長蛇の列をなしていた。

この作品自体は「44.5×39cm」の小品で、青いターバンの少女とか北のモナリザともいわれているフェルメール33歳頃（推定）の作品である。カンヴァスを素地とした上に描かれ、少女は真珠の耳飾りをつけ青いターバンを巻いている。当時ターバンなど、オランダの風俗にみられない情景で、アラビア・西アジア方面の民話の「千一夜物語」や「アラビアン・ナイト」の世界観を彷彿とさせる異国の雰囲気を持って描かれている。会場で作品を観ながら、黄砂吹きすさぶなかでチャドリに身を包み、澄んだ青い目をしたアフガンの少女を思い出した。

この青いターバンに彩色されている高価なラピスラズリや天然ウルトラマリンの顔彩を見て、バーミヤンなどでみられた顔彩とヨーロッパとがつながっていたことが想像された。多くの方に親しまれるターバンの少女の青、私も青系を使うと

きは、宙の色として一段と気をひきしめ、慎重に使用するが、この絵の魅力は、やはり青にあり、未来へ連れ出してくれる少女への憧憬の青なのかもしれない。

五十六億七千万年

日本の古代文化にとって、シルクロードから日本にもたらされたものは数知れないが、特に仏教文化の東漸は、物質文明を発展させる契機となっていった。このシルクロード沿いにある数多くの石窟のなかでも、鳴沙山のほとりにある敦煌（甘粛省・西端）の遺跡は、特別な存在である。そのなかでも、仏教美術の宝庫といわれる莫高窟の千仏洞は、西方とのつながりをもち、それぞれの時代に造営された窟が南北1600メートルにわたり、上下2・3層に何百もの窟が掘り込まれ存在している。

挟小窟に入り、数千年前に刻み、描かれた塑像や壁画を観るにつけ、古来の何千人もの画家たちが、遙か彼方の永遠なる仏・浄土世界に思いを馳せ、それらを表現するために、西域や中国本土からさまざまな壁画の顔料をもこの地に運びこんで、インドやガンダーラから伝来した仏教図像や造形技法をいかしながら描いたのであろう。この敦煌の地がいかに東西交流の要衝であったかが偲ばれる。

今回出展の弥勒菩薩（マイトレーヤ）は、現在は兜率天で天人に説法している菩薩であるが、「56億7千万年後にこの世にあらわれ、衆生を救う未来仏である」と釈迦仏から予言されている。この第275窟の「弥勒菩薩交脚坐像」は、北涼時代（紀元4～5世紀頃）に造像されたもので、3.34メートル超の高さを持ち、頭に冠飾・化仏を配し、塑像には彩色もみられ、方形の台座に安置されている。

この窟の周壁は華やかで、台座の弥勒仏の豪壮な風貌をみて、一度、窟入口から観た光景を描い



「弥勒菩薩交脚像」185×123cm

てみよう、7～8年前から構想し描きはじめた。実物がかなりの大きさなので、描くのに縦2メートルほどのカンヴァスを用意したが、中心の弥勒菩薩を押し込めるように描きこんでも、収まり切れない。それでは脇からせめていこうと、左右壁面にある半跏思惟像、後方壁面の多くの飛天、一对の獅子を先に試みても弥勒仏は収まらず、描いては削り、消すというような状態が何年も続き、初めの構想とは裏腹に、克明に描いた部分はかきけされ、何かと溶け合った生まれたての幼子のような弥勒菩薩像となった。

海と空

永い長い旅路の果てに日本にたどり着いた飛天に思いを馳せ、その幻想された飛天世界をなんらかの形に具現化し、新たな視点から壮観してまとめあげることにはできないものかと模索を続けていた。時が流れ、人から人への機縁に恵まれて、お大師さまが開かれた、一千二百年にわたって受け継がれている祈りの霊地、四国霊場・鯖大師本坊とのご縁に導かれていった。

鯖大師本坊は、徳島市から南へ、遍路道沿いの鯖瀬海岸近くにある。



鯖大師本坊多宝塔 夜景

ここから先、室戸岬方面へ向かうと、瑠璃色の地球と天空がひとつになった壮大な風景が広がっている。室戸岬は、弘法大師が修禅極められた地であり、虚空蔵菩薩の霊験をいただかれた場である。鯖大師は、奈良時代（750年頃）、行基菩薩が四国を巡りし時に、また100年後、お大師さまが四国霊場開創の折に、それぞれこの地が「仏縁ある霊地」であることを印されたといわれている。

鯖大師本坊では、古来世までも人々のこのころの依り所として、また、救いの霊場であらんと一念発起され、鯖瀬海岸を見渡せる高台に、多宝塔を造営された。この折、多宝塔内に飛天飛翔を収めたいとの依頼を受け、多宝塔内陣の四方位壁面に、三年もの月日をかけて描いた飛天を奉納した。多宝塔基壇をのぼって内陣に入ると、観世音菩薩を中心に北面に5体・西面に2体・東面に2体、南

面に2体の仏様の御力を感応した飛天群が、それぞれ異国の楽器を奏し、のびやかに翔舞し散華讃嘆している。また、長押から小壁、天井部分にかけても、鮮やかな油彩で、五彩たなびく雲間に、翼のかわりに天衣をたなびかせた飛天群を描き込んでいる。それは、遙かインドやシルクロード各地で目にした確かな飛天の図像を基に、あらたにイメージした飛天群であり、はるか宇宙の無限の彼方から千年後の未来への想いを多宝塔飛天に託した、祈りの飛天曼荼羅世界である。



飛天曼荼羅内陣

風紋

ヨーロッパとアジアの架け橋と呼ばれているイスタンブール（トルコ）。新市街からボスポラス海峡をフェリーで渡り旧市街を散策、ブルーモスクなどがあるエジプシャンバザールで、チャイを飲んでいる男たちの顔やまなざしに、なつかしい祖先を思い出しながらイスタンブールを後にした。

イスタンブールからアンカラへ、さらに東へ向かうと、アナトリア高原へ入る。ここまできると一気に風景が変わり、火山灰や溶岩が幾重にも積み重なった地層が露呈し、荒々しい台地が続く奇岩地帯、カッパドキア地方に至る。この一帯は古ヒッタイト王国時代に首都ハットゥシャがあった

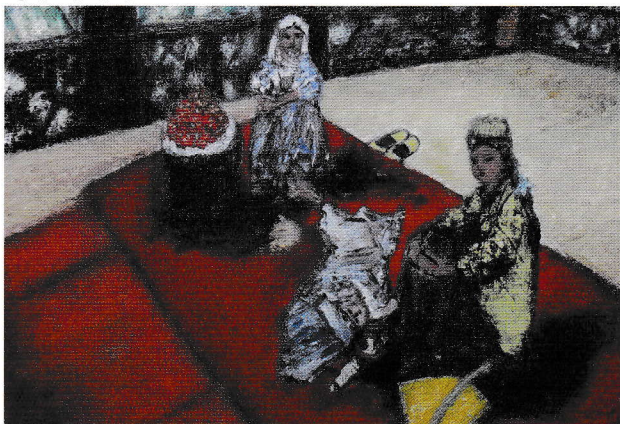


「カッパドキア」45×56 cm

ことから交易ルートの要として栄えていた。

その後、東方に進出したキリスト教（3～4世紀頃）の修道士たちは、この雨風に侵食され風化した山や渓谷に入り、共同生活をしながら修業信仰の場にと岩洞窟を掘りすすめていった。さらに、とげとげしい岩内を丸くくりぬき、そこに彫刻したり、150余りの窟の内部の壁面や天井にまで漆喰の下地を施し、岩肌の白地に、冴えわたった青系のフレスコ画で、聖書にまつわる出来事などを描いていった。キリスト教の岩窟教会の残影が、今も映し出されている。

オアシス



「シルクの歌」45×60 cm

中国の長安からローマへいたる道「シルクロード」は、柔らかいシルクにわれわれを包みこみ、心は遠く東西の民族が交流していた「いにしへの時代」を偲ばせてくれる。ラクダの隊商が砂漠を横断、荒涼とした風景が続く中、黄砂の道を進んでいくと、中継地のキャバン・サライ（隊商宿）にたどり着く。山すそには、美しい村が点在し、そこだけが黄土の中に緑のオアシスが広がっている。

一歩オアシスに入ると、中庭をはさんだ中に、日干しレンガの壁で囲まれた家があり、天井は、ぶどう果樹棚やザクロ樹に覆われている。家具らしきものはないが、床には色鮮やかなバーミリオン系のカーペットが敷かれた上に、もう一枚、レッド系の深い絨毯が重ねられている。部屋の壁ぎわにはカゴがあり、干し葡萄、クルミ、アーモンド、アンズ、桑の実などがあふれでている。真綿の布団が敷かれ、その上で、静かに団扇をあおぎながら、こどもを寝かしつけている澄んだ眼をした婦人が見られる。

座すと、ほどよい風が隙間から通りぬけてゆき、

ここが黄砂の只中とは思えない。夜になると、葡萄棚や木陰の間から満天の星空がみられ、幸福な人間の営みが感じられた。

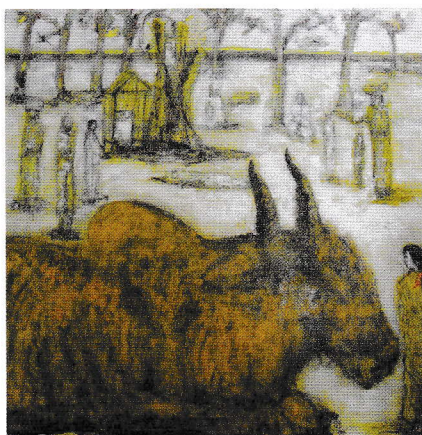
現地の光のなか、路上に佇みスケッチしていると、どこからともなく子供たちが集まってきて、覗きこんできた。自分の子供の頃のことがなつかしく思い出されてきた。

サールナート

乾季や雨季などのインド特有の季節や風土を体感しつつ、北はヒマラヤ連山が遠望できる北インドから、ネパール国境付近にあるルンビニーに至り、南はコモリン岬からスリランカまで、なつかしい原風景をもとめインドを旅した。そんな中私は、2500年前頃、インドの地に誕生され、出家・成道・初転法輪へと極め、やがて布教の旅へ、40数年にわたりガンジス河流域の各地をめぐる多くの教えを広められたブッダ、その機縁ある仏跡の地をめぐる。

その時の想いをかたちに表したいと考え、釈尊の生涯や出来事を、私なりのタッチで表現することはできないかと素描で描きはじめた。まずは、釈尊誕生地のルンビニーからかき始め、ピッパラ樹下で結跏趺坐し悟られた地ブッダ・ガヤー。鹿野苑において、初めて説法された初転法輪の地サールナートなどにすすみ、旅先での出来事や出会いの光景をたどりながら伝導の永い長い道のりを10メートルの紙に載せ、失なわれていくものが多い時代の中、今だに色あせない釈尊の世界「ブッダの生涯」を鉛筆で描いた。

また、サハート・マハート（祇園精舎・舎衛城）を訪れると、出身地が違い、出家の年齢や修業のあり方も様々であった人々が釈尊を慕って弟子となり、この教えを忠実に実践しながら、個性豊かに生きた十人の高弟の姿が浮かんだ。彼らはどのような風貌であったのだろうか、彼らの風貌をイメージし、鉛筆で浮き上がらせ「風貌釈迦十大弟子」



「風光・印度」120×120 cm

を描いた。

さらにクシーナガルを訪ねたが、そこは仏伝にも書かれているが、郊外のサーラ樹の下で身を横たえ禅定に入られた釈尊、十大弟子たちにみとられながら静かに涅槃へ向かわれことが偲ばれる入滅の地である。後年、80年の生涯を閉じられた釈尊を「仏涅槃図」として鉛筆で描きとめていった。

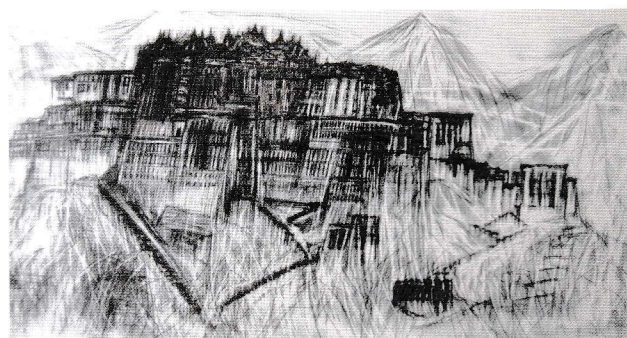
五体投地

高野山にある大学でチベット語などを学ぼうと、「チベット旅行記」で河口慧海を知り、後年、チベット密教の仏教指導者ダライ・ラマ法王14世が来校されたこともあり、チベットへの憧れをもっていった。

私が、海拔3500メートルの高地、ラサ（神の地）に降り立った時、ラサの空は、ブルーというよりウルトラマリンに近い深淵なる青であった。荒涼とした山々が続く中、歩き、動くとき身体が重く、空気は冷え冷えし希薄であることを感じながら、聖地ポタラをめざした。そこにたどり着くと、小高い山の上に、観音菩薩の化身とされるダライ・ラマ法王の壮麗なポタラ宮殿があった。後に、チベット文化の象徴であるポタラ宮殿への感動をデッサンし、油彩で描いた。

峰々の遥か彼方からは、ラサにある釈迦牟尼像を本尊とする大昭寺に向かっている巡礼者がみえた。かれらは、天を仰ぎ手を蓮の華のような仕草で、身や心を清めながら合掌し、経をとえながら膝をつけ、全身をすべらせながら地面に身体を投げ出し進み、仏様に救われたいと、五体投地をくりかえしていた。

このラサから私は、阿弥陀仏の化身とされるパンチェン・ラマ座主のタシルンポ寺を目指し、シガツェへむかった。途中5100メートルの峠を越えたあたりから、軽い高山病なのか、だんだん無口になり、眠気がおそってきた。しかし意識の方



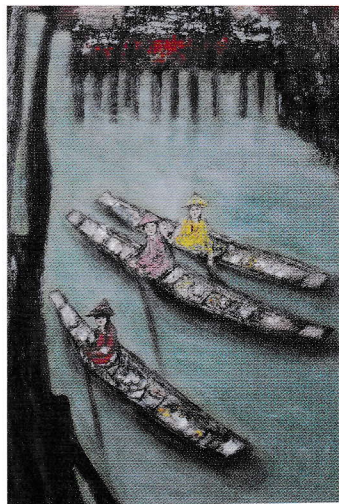
「ポタラ宮」141×334 cm <未出品>

はより鮮明になり、風の音や香りが敏感に感じとれた。

後年、このチベット・インドでの体験や旅先での出会いが溶け合って、密教の教示を受けた「開祖・伝持八祖」を鉛筆で描き表した。自分の中で仏教・密教の世界がさらにひとつになり、新たな宇宙曼荼羅となった。

八曜日

インドを旅した時、ミャンマー連邦共和国（ビルマ）には、仏教そのものが脈脈と受け継がれて



「湖面の市場」91×60 cm

いると聞き、一度訪れたいと願っていた。その後、その機会に恵まれ、まず、モッタマ湾に面したヤンゴン（ラングーン）、エーヤワディー川中流域にあるバガン、国の中央に位置するマンダレー、シャン高原にあるインレー湖などを周遊した。

その中でも、バガン地域は、仏教の聖地であり、さまざまな様式をもった大小の仏塔や寺院が数多くあり、アーナンダ寺院の本堂の中心には、9メートルを遙かに超える、黄金に輝いた釈迦牟尼・迦葉仏などの仏像が、それぞれ四方をむいて納められている。各地寺院には、東西南北の祈祷堂があり、外周には各方位「八曜日の守護像」の祭壇がみられる。ミャンマーでは、伝統暦の「八曜日」があり、何日に生まれたかより、何曜日に生まれたかが重要とされ、曜日によって、その人の基本的な人生などが決まるとされている。それぞれ伝統暦に沿って、祭壇の廻りを引きも切らさず、お参りが絶えない光景をみて、ミャンマーでは、今も釈尊は生き、人々を見守っていられると感じた。

早朝、インレー湖上をボートで進むと、足をまわして櫂を操ってカゴを沈め魚をとるインター族が朝もやのなかにみられ、透明な湖面の無明の闇色、茫洋とした周囲の山々とが、空の茜色に溶けこんでいて、一条の朝光につつまれた湖面を油彩画ではどう表し得ようかと、至福の時が刻まれていった。

アルパカ

ご縁はご縁をよんで、ロッキー山脈を越えアメリカ合衆国ニューヨークを旅する機会を得た。そこでイサム・ノグチという彫刻家の作品を観る機会があり、たしか山頂付近で撮られたのか、彼が大きな一枚岩の上でポーズをした写真を見た。その流れでメキシコのフリーダ・カーロという画家を知り、その時以来、私のなかにメキシコから南米を旅したいとの思いが、膨らんでいった。

時がたち、ある会の集まりがあり、丸いテーブルに偶然同席された方が、ペルー国の方と知り、そのご縁で南米に旅立つことになった。

南米のマチュピチュ（老いた峰）の遺跡を訪れた二日目の朝、この遺跡の背後にそびえたつ鋸の刃をした山、ワイナピチュ山（若い峰）が気になり、登ることにした。登るのには余りにも急な山で、危険を伴うため、名前や入山時間を記入しなければならなかった。もうここからは登山である。命がけで、登りつめた山頂からは、大パノラマ360度の眺望が広がっていた。やおら広い分厚い岩の上に立った時、思い出した。岩の上のあの写真は、標高2690メートル山頂のこの場所で彫刻家イサム・ノグチは撮ったのだと確信した。さらに旅は、ペルーからボリビアへと続いていった。

日本からはかなりの距離にあるアンデス山脈・・・会う人あう人インディオの顔に、祖母を思い出すような容貌や仕草があり、ティティカカ湖など「日本語のチチ（父）カカ（母）」と発音したくなるような地名もあって、なつかしい原風景が広がり、やさしいアルパカが顔をのぞかせていた。



「はるか彼方に」131×294 cm

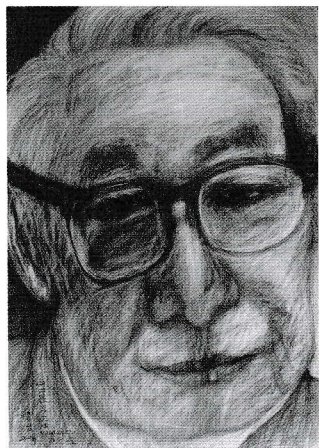
未成

個展の中日の夕方、会場に私のデッサンを丁寧に観られている初老の画家の姿があった。洲之内氏がその画家と話し始められ、会話がはずんでいたので、入口の処にある芳名録を見ると、「山口長男」とサインがしてあった。その時は、山口氏に漠然とした造形に対する姿勢や基本への取り組みを教えていただいた。

個展の後、国立近代美術館に行くと、油彩の赤と黄だけで何十回も塗り込められた山口長男氏の作品がそこにあった。黄の作品からは、シルクロードや砂漠を思い出し、赤の作品からは、インドのマトゥラの暖かい赤の砂岩で掘り込まれた仏像を思い出した。図録にある略歴を見て、山口長男氏の父方の里が、私の出身地、鹿児島県の薩摩川内であることを知り、出会いの不思議さをおぼえた。

その後アトリエに伺い、絵やデッサンについて様々な教えを受け、感化されていった。山口先生から学んだことは、身を持って体験し、それをくりかえし実践していくことであった。先生の制作の姿勢をみても、その教えを実践するもので、作品づくりは限りなく深く、ひとつの色を何回も何回も塗り重ねられ、そこから段々と厚みをまし、自然にできてくるかたちを作品に表されているように感じた。

この頃になってやっと私は、次第に縛られたものの考えや壁がとりはられ、決められた構図や枠をこえて、汪洋とした世界、未成への扉がひとつずつ開いていくように思う。



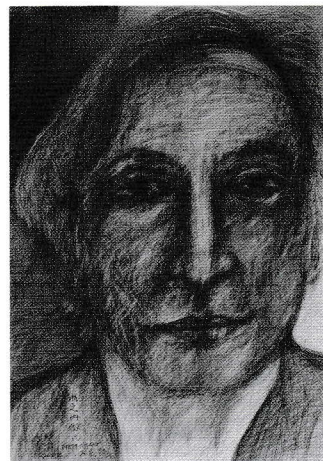
「山口長男先生像」110×79 cm

千六百万分の一

この「千六百万分の一」は、洲之内徹氏が、芸術新潮の「気まぐれ美術館」に連載された、タイトルである。洲之内氏が、私のアトリエを訪ねられた時、絵を見ながら、「これはどこの風景か」と聞かれることが度々あった。当時、中近東から中国へと旅をしていて、広範囲にわたって描いていた時期でもあって、聞かれる度に「千六百万分の一」の地図で説明していた。

洲之内氏が来阪されると、住吉大社近くのお好み焼き屋を案内し、そこでシルクロードやインドなどの旅の話をした。時々、銀座の画廊に、インドや各地の風土に生きる人びとに出会った感動を鉛筆、木炭、コンテなどにたくし描いたデッサン500枚ぐらいをもちこんでいた。こんな膨大な数のデッサンを前にして、一枚一枚を丁寧にみて、夜がふけるのも忘れ、話してくれる方がいるであろうか、もう出逢えないであろう。洲之内氏のことを思うと、懐かしく、感謝でいっぱいになる。

(吉永邦治)



「洲之内徹像」110×79 cm

博物館講座のご案内

演題：「旅・出展作品について語る」

講師：吉永邦治氏（画家・飛天研究者）

日時：4月23日（土）午後2時から

会場：大阪大谷大学博物館

【往復はがきによる事前申込制（先着60名）】

詳しくは、ホームページまたはチラシをご確認ください。

大阪大谷大学博物館

2022年4月1日発行

所在地 富田林市錦織北3丁目11-1 電話 (0721) 24-1039

<https://www.osaka-ohgani.ac.jp>

交通の便 近鉄長野線「滝谷不動」駅下車西へ徒歩7分

開館時間 午前10時～午後4時

休館日 日曜日および4月30日（土）～5月8日（日）

ただし、4月29日（金・祝）は開館



ミックス
責任ある木質資源を
使用した紙
FSC® C101898